

同期の友へ

小紋潤とわたしは昭和二十二年生まれの同期、同年である。ふたりとも今年七十歳になる。コモン、コイケと共に「コ」で始まる。それで雑誌の新鋭歌人特集のような企画で若手の歌を並べるとき、生年月日順で並べても、アイウエオ順で並べても、小紋、小池は隣りあう。そのようなことが何度かあった。小紋潤の名前を知ることになったのはじめであった。

実際に知り合って仲良くなるのはいつごろであったろう。すっかり忘れてしまったが三十代の前半であったことは間違いない。富士田元彦の雁書館に入入りするようになってそこに小紋潤がいた。雁書館刊行の歌集作りの実務を担っていて、装丁などもしきりにやり、本作りに並々ならぬ情熱をもち、また親切であった。わたしの三冊目の歌集『日々の思い出』は装丁の表紙絵こそわたくしが持ち込んだが、あとは全部小紋潤がやってくれた。箱入りの立派な本になって、

少し恥ずかしかったが、嬉しかった。

歌集ができてお祝いしようということのでフグ料理屋に行って行ってくれた。フグ料理のフルコースを食べて、したたかに呑み、満喫し、いざ勘定の段になったとき、今日はお祝いだからじぶんがおごるといって全部を出した。小紋潤が当時のわたしよりもさらに金のないことは知っていたので割り勘にしてくれと懇願したがダメであった。このときの借りの意識がずうっといままで心の中に残って、揺れている。

ほかの人の歌集についてはあんなに熱心に作ったのに、自分の歌集は一冊も出してない。その理由はいろいろあるだろうが、なんといいっても含羞の人の度合いが著しく、自が歌集を目の前に持つなんて恥ずかしくて恥ずかしくてできなかったのだろうと思っ

ている。その気持ちはよくわかる。『蜜の大地』はその小紋潤があらわした最初の歌集である。短歌と関わりを持って

小池光

五十年の歳月が流れた。本人のあとがきの類はなく、谷岡重紀と大口玲子が巻末に懇切な解説を記している。佐佐木幸綱の帯文も力が籠もっている。友情ということをよく感じさせる一冊である。いくつかの歌について感じたままに書く。

・銀河系、その創まりを思ふときわが十代の孤り品すずしも

巻頭の一首で、まだ三十代の歌らしい。声調がすつきりと立ち、まことに正統的な「歌」である。ナイーブで傷つきやすい青年のところが古典的な表現作法によってうつくしく歌いあげられている。ハジマリを「始まり」と書かず「創まり」と書いたのはやはり創世記をうしろにうつすらと引いているのだろう。この歌集の特徴のひとつは「信仰」のもんだいが常にうしろに寄り添っていることのようにおもう。
・樽酒の直すくなる酒を飲みをればせつなきま
でに木の香鋭し